

今年度も、感染拡大防止を重点に据え、学校は児童・生徒の教育機会を無くさないよう、感染症対策を徹底し抑え込んできた。1月以降、一時的にインフルエンザ罹患者が増えたが、校内体制を整え、学びを止めることの無いように尽くしてきた。引き続き、感染症対策をし、学校生活の充実に努めてきた。

「歩みを止めない、学びを止めない、あきらめない」をスローガンに掲げた。〇〇だからできないではなく、「雨にもまけず 風にもまけず 雪にも夏の暑さにもまけないように」、学級閉鎖や臨時休校にすることなくできる可能性を探して、少しずつでも前に進めていくことを徹底した。このような時代だからこそ、一歩踏み出してチャレンジし、前向きな気持ちを育てる教育を行ってきた。

1 令和5年度の取組と自己評価

(1) 全校一体となった教育活動のさらなる推進

- ◆来校制限をしない文化祭を再開した。各学部の学習の成果を舞台と展示で発表した。保護者、地域の方からの励ましがさらなる学習意欲につながった。続けて「第2回八美展」を開催した。本表彰は、本校の児童・生徒が12年間で誰もが1回は表彰を受けることで、生き生きと、伸び伸びと登校し、誇りある家族の一員となるとともに、児童・生徒が丹精込めて作成した作品を称える機会の一環として始めた。表現力、想像力、豊かな心情を育むために今後も取り組んでいく。
- ◆体験活動では「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」を活用した「ジャズオーケストラ鑑賞会」、「音絵本鑑賞会」を実施した。病院訪問学級では「落語鑑賞会」を実施した。本格的な演奏、読み聞かせや語りは、日々の学習では得られない感動と気付きにつながった。今後も児童・生徒に本物に触れる機会を多く提供していく。
- ◆スポーツ大会では全校でポッチャに取り組んだ。学部を超えて対戦し、喜怒哀楽が入り混じり、多くの保護者にも参観してもらいとても素晴らしい取り組みとなった。
- ◆健全育成の一環として、「花植え学習」「水生生物を知る学習」を全校で、小学部では「ポニー体験」を実施した。植物や身近な生物に触れること、水やりや餌やりの中で、思いやりと規範意識を醸成することができた。生き物に触れる機会を設け、校内に生き物のコーナーを設置していく。
- ◆教育実習生を14名受け入れ、教育実習生への指導を通して、特別支援教育の専門性と指導力の向上につなげた。
- ◆昨年度に引き続き、教師養成塾生を受け入れた。塾生の指導をとおして教職員の専門性の向上が図られた。また、研究授業を繰り返す行うことで、所属グループの授業力向上が見られた。
- ◆GIGAスクール端末等の支援機器の活用をとおして、教育内容の充実につなげることができた。デジタル教材の活用、リモート授業の積極的な実施を進めてきた。
- ◆八東ライブラリーの整備と新図書館システムを活用し貸し出し数の管理を行った。八東ビブリオバトルを開催と都立光明学園との「POP交流展」を実施した。互いに作品に対する感想カードを書いたり読んだりすることで、読書への興味・関心を高める、言語活動の充実を図った。

(2) 保護者と共通認識をもったキャリア教育・進路指導の充実

- ◆福祉や医療との連携が必要な生徒の進路については、進路担当、担任がこまめに対応し、保護者の意向を踏まえた進路指導を行った。進学や就職への意欲、職業観・勤労観の育成につなげた。
- ◆児童・生徒対象の進路講演会では、社会人として活躍している障害者の方の講演等を行い、進学や就職への意欲、職業観・勤労観の育成につなげた。保護者参観も推進し、保護者とともに進路について学ぶことができた。
- ◆本校版のキャリアマップを年度初めに教職員、保護者に周知し、学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させ、児童・生徒の発達段階にふさわしいキャリア教育を進めてきた。

(3) 学校内外に向けたセンター的機能の充実

- ◆交流校との直接交流を再開し、地域の小学校、中学校、高等学校の生徒が来校した。直接話をし、スポーツや合唱を楽しみながら交流を深めた。日野市の小学校とは新規に1校と交流を開始。副籍事業も直接交流が再開し、本校以外での学習や行事を経験することができた。準ずる教育課程における「授業研究連携」事業については、実施が叶わなかったが、地域の小・中学校との連携を深められるよう、今後も計画していく。
- ◆地域と一体となった取組である障害者地域交流集会（夏まつり）、学校施設の開放、総合防災訓練やボッチャ交流などを再開した。夏まつりは来校制限をしたが次年度は制限をせずに広く地域に呼びかけていく。直接来校いただき本校の取り組みを知ってもらおうとともに、作品展も引き続き行い、地域への発信と地域連携を途絶えないようにしていく。

(4) オリンピック・パラリンピック教育、芸術・文化教育をレガシーに

- ◆オリンピック・パラリンピック教育「東京2020レガシー」として、学校独自にスポーツや芸術・文化的活動に興味を深まるように様々な取り組みを実践してきた。今年度は、1月にスポーツ大会全校ボッチャ交流を行い、保護者参観も行うなど盛況を得た。
- ◆東京藝術大学との連携事業を進め、児童・生徒の感性を高め、表現力を引き出す指導を行ってきた。教員への的確なアドバイスは、授業改善にもつながっている。

(5) 児童・生徒も教職員も生き生きと成長する学校の実現

- ◆業務の精選、効率化、超過勤務の上限の設定、定時退庁日・定時退庁ウィークの設定等を行ってきたが、超過勤務者の縮小につなげることができなかった。教職員一人一人のライフ・ワーク・バランスの実現は、今後も大きな課題である。
- ◆教育者としての人権意識を高め、児童・生徒への適切な指導を行うよう、計画的に人権研修、服務研修を実施してきた。毎月欠かさず副校長による服務研修を実施し、意識改革も進んでいる。児童・生徒への呼称では、まだ甘さがみられる。教職員の人権意識をさらに磨き、人権が尊重される教育・学習環境を今後も継続して整えていく。
- ◆児童・生徒は互いの障害や困難さを理解しているため、相手を尊重したり、協力したりする良好な関係である。これからも児童・生徒のより良い関係を維持しつつ、互いに切磋琢磨できる教育環境を築いていく。
- ◆初期食シリンジ注入、人工呼吸器の管理、排痰補助装置モデル事業など一歩進んだ医療的ケアを行ってきた。職員一人一人が医療的ケアに丁寧に向き合い、児童・生徒が安心して学校生活を送れるように、今後も教職員の技術と連携を深めていく。
- ◆報告・連絡・相談も徹底してきて、情報の伝達が早くなり、学校組織としての対応が的確に行えるようになった。
- ◆「学校掲示板」やメールによる情報の共有化や効率的な校務処理を図ってきた。「学校掲示板」は様式を見直し、カテゴライズをして分かりやすく情報の共有、発信を行えるようにした。さらに、全校連絡会（職員会議）、企画調整会議はペーパーレス化を進めてきた。今後も効率的な業務の推進を図り、働き方改革につなげていく。
- ◆学校徴収金や就学奨励費に関しては、担当者が教員向け研修を実施し、理解と連携を深めた。教員と事務系職員との関係性もよくなり、組織的に対応できつつある。
- ◆「いじめ・体罰・自殺」防止会議を今年度より設置し、企画調整会議終了後に「長欠生」への学習保障の報告や気になる児童・生徒関係の報告を行い、早期対応に努めた。

(6) 教員の専門性の向上

- ◆1月19日に公開研究会を実施し、「個別の最適なキャリア教育の推進」を主題とし、コミュニケーション意欲の向上と伝達手段獲得に向けた「体験」と「ICT活用」の実践研究の成果を広く報告することができた。
- ◆多くの教育実習生、介護等体験、医療系大学の体験実習などを受け入れてきた。学生への対

応、指導をとおして、教員自身の専門性、指導性の向上につなげた。

◆今年度も教材紹介動画の作成を継続した。自己の教材・教具作成の意図を明確にすることで、教材の安全性や指導効果を検証することができた。

◆ICT利活用、オンライン授業については、外部専門員の活用、ICT支援員「デジタルサポーター」の支援の下、進めている。毎月の全校研究会において授業におけるICTの活用状況を確認できた。今後も教員の専門性の向上を図り、どのような事態にも適応し、「学びを止めない」ように教育環境を整えていく。

2 重点目標への取組と自己評価

① 人権教育			
ア	体罰の禁止・根絶やいじめに未然防止・早期発見・早期対応	体罰0、いじめ0	A
イ	いじめ、体罰防止等に関わる校内職員研修の実施	年間5回	A
ウ	「いじめ・体罰・自殺」防止会議の実施	毎週1回	A
エ	「命の尊さ」についての道徳授業	準ずる教育課程で実施	A
オ	個人情報の取り扱いに関する研修会の実施	年間2回	B
カ	年齢相応の対応と教育内容、教材等の工夫	全教職員	B
② 学習指導			
ア	ICT機器を活用した授業の実	全教職員	A
イ	読書活動の充実	年間20冊以上の読書 全校で10人以上	A
ウ	研究授業による授業改善（年次研該当教員への指導・助言）	随時	A
エ	授業力向上研修（研修会、教材展示会）の実施	年間3回	A
オ	PT、OT、ST等を活用した専門性の向上	通年	B
③ 生活指導			
ア	児童・生徒、保護者のニーズに応じた適切な指導と連携	個別面談年間3回	A
イ	視覚教材、ICT機器等を活用しての指導の充実	通年	A
ウ	摂食機能の適切な実態把握と校内研修の推進	年間2回	B
エ	地域と連携した防災・災害時対応の充実	防災教育推進委員会年間2回	A
オ	宿泊防災訓練を通じた災害時の対応能力の向上	年1回	B
カ	デジタル技術を活用した教育の推進 （プログラミング、デジタル教科書・教材、オンライン学習）	通年	A
④ 進路指導			
ア	キャリア発達の視点を生かした年間計画作成と授業づくり	通年	A
イ	児童・生徒による八東ライブラリーの運営・整備	通年	A
ウ	児童・生徒及び保護者の希望に沿った進路先の決定	100%	A
エ	児童・生徒の資格取得の推奨（PC検定、漢検、英検等）	全校で10人以上	B
⑤ 特別活動			
ア	オリンピック・パラリンピック教育の推進	通年	A
イ	学校活性化プロジェクトの実施	通年	A
ウ	地域交流校との交流及び共同学習の実施	年間5回以上	B
エ	部活動の充実（スポーツ、文化的活動）	通年	A
オ	スポーツ大会への参加、作品展示会等への出品	随時	B
⑥ 健康・安全			
ア	衛生指導、感染症予防及び健康教育に関する研修会の実施	年間2回	A
イ	児童・生徒、教職員の安全の確保	事故0件	A
ウ	医療的ケア実施時の安全	事故0件	A
エ	職員検診受診率	100%	A
オ	児童・生徒の体力向上（障スポ、ボッチャ、ハンドサッカー）	通年	A
⑦ 特別支援教育のセンター的機能			
ア	学校公開の実施	年間2回	B
イ	公開講座、ボランティア講座の実施	年間2回	B

ウ	地域の小・中・高と連携したコーディネーター連絡会の開催	年間3回	A
エ	ホームページの更新	年間100回以上	A
⑧	学校経営・組織体制		
ア	サービスの厳正、個人情報の保護等に関する研修会の実施	年間10回	A
イ	学校閉庁日の実施	年間5日	A
ウ	定時退庁日の設定	月1回	A
エ	定時退庁ウィークの設定	年間2回	B
オ	教職員の超過勤務の上限	1か月45時間以内 年360時間以内	B
⑨	訪問学級における指導の充実		
ア	在宅訪問学級のスクーリングの実施	随時	B
イ	訪問学級を置く病院の医療スタッフとの連携会議の実施	年間2回	A
ウ	管理職による授業観察・指導助言	授業者一人につき年1回以上	B
エ	タブレット端末等のICT機器を活用した授業内容の充実	通年	A

A：100%達成できた B：ほぼ達成できた C：十分達成できなかった

D：ほとんど達成できなかった -：感染症対策のため実施できなかった

3 次年度以降の課題と対応策（令和5年度学校運営連絡協議会からの提言）

<提言1> 開かれた学校にむけて「地域とのつながり」、「情報発信」の充実を図る。

現在、ホームページ、X(旧Twitter)、マチコミ、Microsoft Teams、GIGAスクール端末、一人1台端末等で学校の様子や児童・生徒の様子を発信されている。今後も積極的に「情報発信」を行うこと。

今年度4年ぶりに制限のない形で実施した八東祭では、保護者の皆様を含め、地域の方々、卒業生と多くの方々に来校していただき児童生徒の成長の様子、学習の成果の発表を見ていただくことができた。児童・生徒にとっては多くの経験の中で自信と学びを得る機会となった。

デジタルな情報発信とともに実際に児童・生徒の様子を見ていただく機会を増やし、デジタルな情報発信の充実とともに、地域とのつながりの充実も含めた更なる開かれた学校を目指すこと。

<提言2> 教職員の働き方改革と保護者の付添の負担軽減を考慮した宿泊行事の実施を図る。

令和6年度より、各学部の宿泊行事について、すべて1泊2日とし、各宿泊行事の行先、内容を見直し、学部毎の系統性を含めた、宿泊行事の実施を進めること。

<提言3> 12年間を通した「キャリア教育」に組織的に取り組むこと。

来年度に向けてもキャリア教育についての「発信」が必要となっている。

「キャリア教育」とは、「生涯教育」将来につながる学習である。難しい課題ではなく、すでに授業で取り組んでいるねらいや内容、日々の取組の中で、児童・生徒一人一人の将来につながることを行っている。現在の取組を整理するとともに、12年間のキャリア教育計画の作成、キャリアマップ、キャリアパスポート等の活用は有効である。本校版を作成、活用し、小学部段階から児童生徒の将来に向けて、学びの履歴等を保護者と共有できる場、機会を設けること。

<提言4> 「指導方法の6分類」を使い、児童・生徒がICT機器を活用する「新しい学び」を充実すること。

児童・生徒にGIGAスクール端末、一人1台端末が配備され、児童・生徒が自分のICT機器を「どのように使用していくのか」、そして「何を学ぶのか」、「どんなことを学ぶのか」等が求められている。

今後も引き続き「指導方法の6分類」を行うことで、ICT機器を使用しての学習の「型」をつくりあげ、児童・生徒の実態に応じた学習を行えるようになるような発信をすること。

これまで本校が培ってきた肢体不自由・病弱教育の専門性を基に、全校研究のテーマである「個別最適なキャリア教育の推進」の実践研究を通して児童・生徒たちがICT機器を使って効果的に学習できるように「新しい学び」の充実を今後も図ること。

上記提言を次年度学校経営計画に反映させ、活気あふれる学校づくりにまい進する所存である。